愛知県における豚の育種改良のこれまでとこれから

農業総合試験場　内倉健造　鈴木雅大

【はじめに】

愛知県における豚の育種は、昭和 45 年(1970 年)度に全国に先駆けて系統造成として開始された。以来、育種改良を継続し続けている。一方で、近年、生産者の規模拡大、豚熱の発生、飼料高騰に伴い、本県の養豚産業を取り巻く環境は大きく変化しつつある。そこで本県における育種改良のこれまでについて取りまとめ、これからについて考察する。

【背景】

本県は全国で 10 位の豚飼育頭数を有する。県内に貿易港を有し、飼料工場が存在するとともに、食品産業も盛んでエコフィードなども活用できる。また、人口が多く、県内に４つの豚のと畜場を有していることから流通・消費に優位性がある。近年、生産性の高い海外種豚や県外の種豚を利用する生産者が増加するとともに、豚熱発生後は系統豚増殖配布施設が閉鎖され、その傾向が強まっている。一方で、流通業者からは肉質の良い豚肉が求められている。

【これまで】

ランドレース（L）種３系統、大ヨークシャー（W）種３系統、デュロック（D）種１系統をいずれも日本養豚協会が認定する系統豚として育種してきた（図１）。うち D 種のアイリスナガラについては岐阜県と共同で造成を行っている。これら造成された品種は畜産総合センターから配布され、三元豚のもととなる３品種すべてを系統豚として維持供給する全国唯一の県となっている。

図１　愛知県における豚の育種改良

【現在】

2016 年より、アイリスナガラに代わる D 種系統豚の造成を、７農場からもと豚を導入し開始した。改良目標は、現行の高い発育性を維持しながら、背脂肪厚の改良を図るとし、選抜を行っている（表１）。2019 年に本試験場で豚熱が発生し、集団全てが殺処分されたものの、受精卵から集団を再生し、2025 年に系統豚として認定されることを目指して造成を再開させている。

表１　新たなデュロック種系統造成の目標値

項目	目標値（雄）	（参考）現行アイリスナガラ	
		数値	評価
１日平均 増体重	1,020 g 以上	1,015 g	○
背脂肪厚	1.6 cm	1.9 cm	△
ロース断面積	40 cm^2	40 cm^2	○
肉　質	(維持)		○

【これから】

長期の維持期間に及んでいる L および W 種の系統豚に替わる種豚の育種を早急に進める必要がある。また生産性向上だけでなく、これまで系統豚で評価されている肉質にも特徴を持つことが期待される。両品種を同時に育種するためには集団の大きさを小さくする必要がある。それに伴い選抜圧は低下するものの、生産性の高い個体を導入すれば短期間で能力を引き上げることが出来る。このことから、現在策定が進められている新たな認定基準に沿う形で、肉質を目標形質として改良を行うことが必要と考えられる。